

「古稀集」～来し方思えば、持って瞑すべし（日本語①）

最近、耳についてしかたがない言葉がある。それは、「ありがとうございました」である。毎日耳にするので気になってしょうがない。むろん、言葉自体が気になるのではなく、使われる状況が気になるのだ。

テレビのスポーツ中継には解説者が付き物である。その中継番組の最後に交わされる会話をよく聞いていただきたい。アナウンサーが「～さん、ありがとうございました。」と言うと、解説者も「ありがとうございました」と言う。これに違和感を覚えるのは私だけだろうか？ ひと昔の解説者たちは、「失礼しました」とか言っていた記憶があるのだが。

ときに、最近の解説者たちは、どう考えて「ありがとうございました」と言うのだろうか？ おそらく慣習的にその言葉を使っているだけで、深く考えて使っているわけではないのだろう。まさか、「私を解説者として使ってくれてありがとうございます」、もっと言えば、「解説料を下さってありがとうございます」という意味で使っている訳ではないと思うのだが、考え過ぎだろうか。

言うまでもなく、「ありがとうございました」に対しては「どういたしまして」と返すものだろう。せめて、「こちらこそありがとうございました」ならばまだ分かる。ちなみに、孫の幼稚園の発表会を見にいったら、司会者の「ありがとうございました」に対し、園児たちは「どういたしまして」と返していた。その幼稚園は正しい教育をしている。

解説者を務める方は、現役時代一流の選手だった方がほとんどである。才能に恵まれた選手が一流と呼ばれるまでには相当の努力を重ねたに違いないし、それ以外の世界を知る機会がなかったことも想像に難くない。もちろん、一般的に厳しい上下関係があると言われるスポーツの世界で、礼儀作法はきちんと学んできたに違いない。しかし、社会常識を学ぶ機会は少なかったのかもしれない。

ならば、同席したアナウンサーが、「一般的にこういう場合はこう言うのですよ」と指導すればよいのではないだろうか？ テレビの世界でアナウンサーはプロであり、解説者はアマチュアである。それも、一部の解説者の方を除いて駆け出しである。名選手が必ずしも名監督ではないように、名選手が上手に解説できるとは限らないのである。いや、解説の内容のことはさておき、最後の挨拶ぐらいきちんとできないでは視聴者に対して失礼であろう。また、見ている子どもたちにも悪影響を与えかねない。

言葉は変わっていくものであり、誤った使われ方をされた言葉が定着していくこともままあることである。例を挙げれば、私たちは「世論」を「よろん」と習ったものだが、現在では「せろん」でもいいことになっている。「遺言」もしかりである。後世においては、「ありがとうございました」と言われたら、「ありがとうございました」と返すことが常識になっているのだろうか？

(2024.11.27)